動詞派生か Root 派生か
——分散形態論による連用形名詞の分析——

田　川　拓　海

1. はじめに

1.1. 目的

本稿では，動詞連用形の形態をとる名詞（「泳ぎ」など）が動詞からの派生ではなく範疇未指定の要素 Root が直接名詞化したものであるとする Volpe (2005) の分析について，1）モーラ数に関する制約，2）自他交替に関わる形態，3）形容詞派生動詞，4）受動 / 使役形態素，の四つの観点から経験的な問題があることを明らかにし，Root が一度動詞化されそれがさらに名詞化された，すなわち動詞派生の連用形名詞が存在することを主張する。

1.2. 考察の対象：「連用形名詞」の範囲

西尾 (1961) は動詞連用形が構成要素として含まれる様々なタイプの名詞を挙げ (1) のように分類している [1]。

(1) A.　単純動詞に対応：救い，眺め，…
　　B.　複合動詞に対応：引き伸ばし，乗り換え，…
　　C.　動詞 + 動詞で複合動詞と対応無し：立ち見，崩し書き，…
　　D.　並列関係：乗り降り，売り買い，…
　　E.　X+ 動詞連用形：品切れ，ぐい飲み，甘煮，…
　　F.　動詞連用形 + 名詞：干し草，届け先，飛び地，…

本稿では動詞との派生関係に議論の焦点を絞るため，連用形名詞を (2) のように定義し，考察の対象を西尾 (1961) におけるタイプ A, B のみとする [2]。本稿で「連用形名詞」と呼ぶものはこのタイプ A, B のみを指す。

(2) (狭義の) 連用形名詞
現代日本語 (共通語) で終止形 (ル形) : 動詞⇔連用形 : 名詞, という対応があるもの。

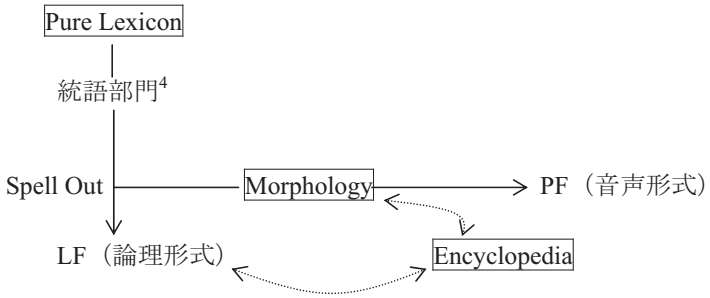
2. 分散形態論

2.1. 文法モデル

Volpe (2005) は分散形態論 (Distributed Morphology: Halle and Marantz (1993) ほか) を用いた研究である。分散形態論にはいくつかの重要な理論的前提・仮説が存在するが, 本節では Volpe (2005) の分析および連用形名詞の議論に関係するもののみを導入する[3]。

分散形態論の文法モデルは以下のように仮定されている。

(3) 分散形態論の文法モデル



"Pure Lexicon"[5] は統語計算の対象となる形式素性 (formal feature) が存在する部門である。"Morphology" は具体的な個々の語彙項目 (音と意味の対応) が存在し, 語彙挿入 (Lexical Insertion) が行われ, 統語計算の出力に対して具体的な形態 / 音形が決定される部門である。"Encyclopedia" は Morphology での操作と LF の後の意味解釈の際に参照される, 特定の語彙項目に関する語彙意味, 非合成的意味や百科事典的知識が存在する部門であると考えられている (田川 (2012) : 199-200)。

語形成の分析について重要なのは次の仮説である。

(4) 単一動力仮説[6]（Single Engine Hypothesis）
二つの要素を組み合わせて新しい要素を作りだす操作は，全て統語部門で行われる（Marantz (1997, 2001), Arad (2003) など）。

これは端的に述べると，従来語彙部門（Lexicon）で行われるとされることの多かった語形成も，要素自体の結合は統語部門で行われるという主張である。この分散形態論のアプローチは「語形成に対する統語的アプローチ」と呼ばれることもあるが，語の世界と句・文の世界を全く一緒だと考えるわけではなく，両者の間にある連続性を重視し，それを統語部門の枠組みで取り扱おうとするものであるという点に注意が必要である。

2.2. Root と語形成

分散形態論の登場した 1990 年代前半は屈折形態論に関する研究が多かったが，1990 年代後半から Root という概念が導入されるとともに，派生形態論・語形成の研究も増大してきた。Root とこの概念に関する仮説は以下のようにまとめることができる。

(5) Root 仮説[7]（Root Hypothesis）
いわゆる語彙範疇の統語範疇（V, N, A）はもともと指定されているのではなく，範疇未指定の要素“Root”＋統語的環境による指定で決まる。（Marantz (1997, 2001), Arad (2003) など）。

これはすなわち，動詞，形容詞などの語彙的要素は統語的原子（syntactic atom）ではなく，統語部門において形成されるということである。

この概念と仮説を導入すると，語彙範疇の形成について次の分類が可能になる。

(6) Root-derived と Word-derived[8]（Arad(2003) など）
a. Root-derived: Root から直接形成される場合。ここから派生される各語彙範疇（V, N, A）それぞれの間には（比較的）規則的な意味的 / 音韻的関連性が無い 。
b. Word-derived: 一旦語彙範疇が指定された要素から派生される場合。元の語の意味的 / 音韻的特徴を引き継ぐ。

これはすなわち，語彙範疇要素の派生の仕方について大きく分けて二つの種類があり，Root に最初の語彙範疇が指定されて要素が形成される過程[9]((6a))と，一度範疇が指定されたものからさらに語彙範疇要素を派生する場合((6b))との間には質的な差があるという主張である[10]。実質的にこの概念および仮説は，分散形態論において語形成のいわゆる“語彙的な”性質，すなわち派生形態論に見られる意味の不透明性や不規則性などを捉える装置ともなっている。

さらにこの質的な差は，語彙範疇を決定する機能範疇主要部をフェイズ（phase）主要部（Chomsky (2000, 2001)）と考えることによって，統語的な局所性で捉えられるようになる[11]（Marantz (2001), Arad (2003), Embick (2010) など）。

具体例については，Volple (2005) の分析を通して見ることとする。Volpe (2005) はこの Root-derived と Word-derived の違いを用いて，日本語の名詞化の分析を行っている。

3. Volpe (2005) の日本語の名詞化に対する分析

3.1. 連用形名詞と「- もの」名詞化

Volpe (2005) は分散形態論の枠組み，特に Root-derived/Word-derived の区別を用いて日本語の（単純動詞の）連用形名詞，および接尾辞「- もの」の付加による名詞化について分析している。Volpe (2005) の主張をまとめると以下のようになる。

(7) Volpe (2005) の名詞化に関する主張
  a. 連用形名詞は Root-derived であり，「- もの」の付加による名詞化（例：食べもの）は Word-derived（Root → V → N）である。
  b. 連用形名詞には自他交替に関わる接辞を含むものがあるが，それらは機能範疇 v の具現形ではなく，Root に付加する“affixal particle”である。

まず (7a) については，対応する動詞と連用形名詞の意味を見ると規則的に対応しているとは言えないという記述から，連用形名詞は Root-derived であり，（Root →）動詞→連用形名詞という過程を経る Word-derived のものは無

いとしている。動詞と連用形名詞の意味の対応は以下の通りである。

(8) 動詞と連用形名詞の意味の対応（Volpe (2005): 44, Table 9）

動詞	連用形名詞
a. 散らす	ちらし（広告・宣伝文を印刷した紙）
b. 出す	だし（出し汁）
c. 流す	ながし（台所にある物を洗ったりする設備）
d. 垂れる	たれ（食べものに味を付ける濃い汁）
e. 切れる	きれ（布の切れ端）
f. 離れる	はなれ（離れ家）

確かに，意味がかなり特殊化したものも見受けられる。

一方, 連用形名詞と対比されているのが「- もの」の付加による名詞化（以下「- もの」名詞化）である。

(9) 接尾辞「- もの」による名詞化 [12]
食べもの（食べる），飲みもの（飲む），着もの（着る），…

「- もの」名詞化では連用形名詞と異なり派生の結果の名詞と動詞の意味の対応はほぼ透明なものになっている。この意味の規則性・合成性から，Volpe (2005) は「- もの」名詞化は動詞化という過程を経た Word-derived（Root → 動詞→名詞）であると主張している。

ここで重要なのは，「- もの」名詞化は豊かな生産性を持つわけではなく（# 投げもの [13]，# 蹴りもの，# 燃やしもの），“語彙的な”性質も持っている点である。すなわち，Volpe (2005) の分析は，同じく語彙的な性質を持つ派生である連用形名詞と「- もの」名詞化の間にある，意味の規則性・合成性の差を分散形態論の枠組みに沿って捉えることに大まかには成功している。

3.2. 自他交替に関わる形態

本節では，(7b) の自他交替に関する主張がなぜ (7a) のような名詞化に関する議論において必要になるのか見ておく。

分散形態論のような語形成に関する統語的アプローチを選択した場合，自他交替に関わる接辞が機能範疇 v の具現形態だとする分析がかなり有力である

(長谷川(1999)，西山(2000)など)。

しかし，その分析を採用すると，自他交替に関わる接辞を含む連用形名詞は「動詞性」に密接に関わる機能範疇 v をその内に含むことになり，連用形名詞は動詞化を経ておらず Root を直接名詞化したものであるという Volpe (2005) の分析と矛盾するのである。

以下に自他交替に関わる形態を含む連用形名詞の例を示す。

(10) 自他交替の形態的対応と連用形名詞

	自	他	連用形名詞
a.	tir	tir-<u>as</u>	tir-<u>as</u>-i
b.	naga-<u>re</u>	naga-<u>s</u>	naga-<u>s</u>-i
c.	kir-<u>e</u>	kir	kir-<u>e</u>
d.	ag-<u>ar</u>	ag-<u>e</u>	ag-<u>ar</u>-i

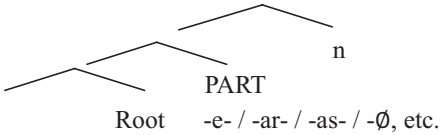
(10)の下線の自他交替に関わる形態が機能範疇 v の具現形であるとすると，連用形名詞に動詞化を経たものが存在するということになる。また，「上がり(＝収益，(10d))」の例を見ると分かるように，それらの例も Volpe(2005)が Root-derived の根拠としている意味の不規則性・不透明性を有しているのである。

Volpe(2005)はこの問題に対して，自他交替に関わる接辞は機能範疇 v の具現形態ではなく, Root に直接付加する“affixal particle”(den Dikken (1995))であると分析している。

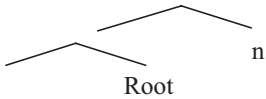
Volpe(2005)がこの分析の根拠としているのが，自動詞 / 他動詞両方に同じ形態“-e-”が現れるという事実である。(10c, d)を見ると，(10c)では自動詞の方に -e- が現れ，(10d)では他動詞の方に -e- が現れている。ここから，自他交替に関わる形態は項の数を決定する機能範疇 v の具現形ではなく，den Dikken (1995)が示した数種類の項の増減に関わるオランダ語の接頭辞“ver-”などと同じ “affixal particle”であるとするのである。

Volpe(2005)はその上で，Root と affixal particle からなる要素を“radical”と呼び，連用形名詞に対して次のような下位分類を提案している。PART が affixal particle，n が名詞化を担う機能範疇主要部である。

(11)　a. radical nominalization



b. root nominalization



(Volpe (2005): 60)

自他交替する動詞と対応する連用形名詞は(11a)，自他交替しない動詞と対応する連用形名詞は(11b)の構造を持つことになる。

4. Volpe (2005) の問題点

本節では Volpe (2005) の連用形名詞の分析には，1) モーラ数に関する制約，2) 自他交替に関わる形態，3) 形容詞派生動詞，4) 受動 / 使役形態素，の四つの点で経験的な問題があることを示し，Root が一度動詞化されそれがさらに名詞化された，すなわち Word-derived の連用形名詞が存在することを明らかにする。

4.1. モーラ数に関する制約

Volpe (2005) によれば，西尾 (1961)，影山 (1999) で指摘された連用形名詞に対するモーラ数の制約が，(11) の分類によって捉えられると主張している。

(12)　a. Simple Root Structure, *Less than 3 Morae
　　b. Complex Radical Structure, No Mora Restriction

(Volpe (2005): 61)

これは「自他交替しない動詞と対応し，かつ 1 および 2 モーラの連用形名詞は無い（少ない）」という主張であるが，以下に示すようにある程度の量の反例があるように思われる。

(13) 自他交替しない動詞と対応する 2 モーラの連用形名詞[14]
読み，蹴り，飲み，行き，すり，狩り，反り，問い，塗り，…

数が少ないように思われるかもしれないが，連用形名詞の生産性を考えると，これらは無視できない数であろう。

従って，モーラ数の制約自体は存在するとしても，それが radical/root の区別を支持するとまでは言えないと考えられる。

4.2. 自他交替に関わる接辞とヤコブセンの一般化

自他交替に関わる接辞に関しては，確かに -e- の問題はある[15]が，Volpe (2005) 自身も参考にしている Jacobsen (1992) による次のような一般化があり，かなりの程度規則性も見られる。

(14) ヤコブセンの一般化（西山 (2000)：146）
日本語の自他交替の接尾辞で，[s] が現れた場合はその動詞は他動詞で，[r] が現れた場合はその動詞は自動詞である。

この一般化に見られるように，自他の別と形態はかなりの程度規則的に対応しており，-e- のみの存在をもって自他交替に関わる接辞全てを機能範疇 v とは関係無い要素であるとしてしまうのには問題がある。

少なくとも，Volpe (2005) の主張は，(14) のような一般化が偶然の産物であるか文法的な要因とは異なるところに根ざす傾向であると示す，あるいは affixal particle という概念と (11a) の構造を用いても分析可能であることを示さないと成り立たないものである[16]。

4.3. 形容詞派生動詞の連用形名詞

4.1，4.2 での議論に加え，4.3 および 4.4 では動詞化を経た連用形名詞が存在する，より直接的な証拠を示す。

第一に，形容詞派生動詞（deadjectival verb）と対応する連用形名詞の存在が挙げられる[17]。

(15)	形容詞	動詞	名詞	
	a. nemu(-i)	nemu-<u>r</u>	：nemu-r-i	眠り

b. ama(-i)	ama-e	：ama-e	甘え[18]
c. ita(-i)	ita-m	：ita-m-i	痛み
d. kowa(-i)	kowa-gar	：kowa-gar-i	怖がり
e. taka(-i)	taka-mar	：taka-mar-i	高まり
f. hazukasi(-i)	hazukasi-me	：hazukasi-me	辱め

これらの動詞は対応する形容詞との形態論的な関係を考慮すると，下線部分が動詞化を担うと考えなければならない。すなわち，その形態を含む連用形名詞は動詞化を経ていると考えざるをえないのである。これは Volpe (2005) の主張である「連用形名詞は動詞化を経ず，Root 派生である」に対する強くかつ体系的な反例[19]になっている。

なお，これらの連用形名詞とその対応する動詞は比較的透明な意味的対応を成しており，Volpe (2005) の枠組みでは Word-derived として分析できる可能性が十分に存在する。

4.4. 受動 / 使役形態素を含む連用形名詞

さらに，連用形名詞には 4.3 で示した形容詞派生動詞ほどは体系的でないものの，受動 / 使役形態素を含むものも存在する。

(16)　受動 / 使役形態素を含む連用形名詞
　a. 引き込まれに注意！（写真左，つくばエクスプレス車内）
　b. ひも，コードのはさまれ（写真右，京都大学構内）

　c. 読み聞かせ[20]，寝取られ，お呼ばれ，ふぁぼられ[21]（web サービス Twitter），泳がせ[22]（釣り），寝かせ[23]（携帯電話，パチンコ），…

動詞的要素を含まないのに受動 / 使役形態素が現れるということはかなり考えにくく，これらの例も 4.3 の議論と同じく動詞化を経た Word-derived の連用形名詞は存在しないという Volpe (2005) への反例となる。

5. おわりに

5.1. 今後の課題及び展望

以上，4 節で Volpe (2005) の分析に経験的な問題点が四点存在することを示した。連用形名詞には動詞化を経て派生されるものが確実に存在するのである。

しかし，本稿の議論では全ての連用形名詞が動詞化を経ているということを示したわけではない。連用形名詞に Volpe (2005) や伊藤・杉岡 (2002) が示したような“語彙的な”性質があることも確かであり，連用形名詞に複数のタイプを認める分析の可能性も含めてさらなる研究が必要である。

また，連用形名詞には以下に示すように統語的複合動詞（影山 (1993)）と対応するものも存在する。

(17) a. 投球フォームの<u>投げ終わり</u>を見ることにしている。
b. <u>勉強し直し</u>を考えています。
c. 評論家は次回作への<u>期待し過ぎ</u>を指摘している。
d. 傘の<u>置き忘れ</u>が多い。

(17b, c) は統語的複合動詞であることを示すテストの一つである漢語動名詞を含むものである。

これらの例は連用形名詞が統語部門より前に位置する語彙部門 (lexicon) で形成されるとする分析では捉えることが不可能である。分散形態論においてはこれらも統語部門で形成されると考えるので，4.3 で示した受動 / 使役形態素の場合と合わせて無理の無い取り扱いが可能となる。

その一方，分散形態論においては Root に関する研究の蓄積が進んではいるものの，派生形態論の“語彙的な”性質をどのように取り扱うかという点ではまだまだ課題が残されている。以下，その一つの議論を紹介したい。それは本稿で取り扱った Root-derived/Word-derived の区別と意味的振る舞いの関係についてのものである。

Root-derived が意味的に非合成的な対応関係を形成し, Word-derived が（比較的）規則的な意味的派生を見せるという傾向はあるように思われるが，意味的な振る舞いを根拠にして Root-derived/Word-derived の区別をするには，語

形成の振る舞いにおける非合成的(non-compositional)/ 慣用的(idiomatic)といった判別基準をさらに洗練させなければならない。言い換えると，他の基準によって示された区別に付け加える形での傾向としては観察できるが，分析の根拠にできるほどしっかりした議論には未だなっていないということである。

Harley(2010)はこの問題を取り上げ，非合成的な意味形成は語より上のレベルの領域でも起こるので（例：イディオム），意味的な透明性・合成性・規則性は Root-derived / Word-derived の質的違いが決定的に現れる現象とは言い難いのではないかと指摘している。

(18)

	Root-derived	Word-derived	
a. edit	edit-or	edit-or-ial	‘of or relating to editor’ ‘<u>opinion article</u>’
b. class	class-ify	class-ifi-eds	‘<u>small newspaper advertisements</u>’

(Harley (2010): 1)

また，(18)の例を見ると，下線に示したように Word-derived の語でも慣用的な意味を持つことがあることがわかる。これを ad hoc ではない形で規則的・合成的な意味であるとするのは現時点では難しい。

本稿では主に意味的な現象に焦点を当てたが，音韻的な側面からの議論の可能性を指摘しておきたい。それは，語アクセントに関わる現象である。

三宅(2005)によって，連用形名詞の語アクセントは動詞と規則的な対応を成しており平板型か尾高型になるという記述がなされている（三宅(2005)：6-7)。

しかし，次に示すように連用形名詞で起伏型のものもある程度存在する。

(19)　連用形名詞で起伏型語アクセントを持つもの[24]
はˇなれ（離れ），かˇり（狩り），さˇわぎ（騒ぎ），ねがˇい（願い），おもˇい（思い），かんがˇえ（考え），なˇがし[25]（流し），すˇり，にふˇくめ（煮含め），ささˇえ（支え），たくわˇえ（蓄え），…

これは音韻的に動詞と規則的な対応を成していないということであり，Root-derived の特徴の一つである。

平板 / 尾高型と起伏型の違いと意味論的な振る舞い（非合成性）が規則的に

対応している，ということは現段階では言えないが，連用形名詞の性質を明らかにする上ではこのような音韻的な側面にも光を当てる必要があるのではないだろうか。

また，本稿で取り扱うことができなかった重要な問題に名詞化された場合の項の現れ方がある。

(20) a. ドアを蹴った／＊ドアの蹴り
b. 絵本を読み聞かせる／絵本の読み聞かせ
c. 傘を置き忘れる／傘の置き忘れ

伊藤・杉岡(2002)が指摘するように，多くの連用形名詞は対応する動詞の項をそのまま取ることが難しい((20a))。一方，(20b, c)のように後置詞を用いなくても項を取れるものもあるように見受けられる[26]。このような差が，他の連用形名詞の特徴，たとえば使役形態や統語的複合動詞の存在などと関連しているかどうか，さらに詳細な記述を行い分析する必要がある。

これらのような現象も含めて考えると，連用形名詞に限ってもいくつかのタイプに分類する必要があるのかもしれない。分散形態論による統語論的アプローチがそれらの差をうまく捉えることができるのか，今後も考察を重ねたい。

5.2. 活用研究との関係

連用形名詞の研究は，派生形態論 / 語形成という点だけではなく，活用としての連用形の研究においても大きな役割を担うと考えられる。

田川(2009, 2012)では子音語幹動詞の連用形の /i/ の出現には動詞化の [+V] の存在が必要であると主張されている。連用形名詞について Root からの直接の名詞形成を認めると，連用形の形成に [+V] が必要ない場合があるということになる。しかし，[+V] が使えないとなると，子音語幹動詞というグループに対しては音韻論的環境などに関わらず一律に /i/ が挿入音（epenthesis）として現れることをどのように統一的に捉えるのかが問題となる[27]。

すなわち，連用形名詞の分析が連用形そのものの分布がどのように分析できるかに大きく影響するのである。

連用形名詞の性質は先行研究によってかなりの程度明らかにされてきたと言えるが，本稿で示したとおりその振る舞いは様々な規則性・体系を見せつつも複雑である。動詞派生か Root 派生かという観点は分散形態論という一つの形

態理論における争点であるが，その提起する問題と関連する現象群は日本語にとどまらず派生形態論における重要な問題を経験的に追求する手がかりの一つとなるであろう。

謝辞

本稿は Morphology and Lexicon Forum 2011（大阪大学，2011 年 9 月）での発表を基にしている。フォーラムおよびその前後に多くの方から貴重なご質問･ご指摘をいただいた。また，竹沢幸一氏との議論からも多くの示唆を得た。記して感謝したい。本稿における不備や誤りは全て筆者の責任である。本研究の一部は，日本学術振興会科研費（若手研究 (B)「屈折・派生形態論の融合のための分散形態論を用いた日本語の活用・語構成の研究」（平成 25 年度～平成 26 年度，研究代表者：田川拓海，課題番号 25770171）および国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」による援助を受けている。

【引用文献】

Ackema, Peter (1999) *Issues in Morphosyntax*. John Benjamins Publishing Company.

Arad, Maya (2003) “Locality constraints on the interpretation of roots: The case of Hebrew denominal verbs,” *Natural Language & Linguistic Theory* 21. pp.737-778.

Arad, Maya (2005) “Word-level phases: Evidence form Hebrew,” *Perspectives on Phases, MITWPL 49*. Martha McGinnis and Norvin Richards (eds.), pp.29-48.

Chomsky, Noam (2000) “Minimalist inquiries: The framework,” *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. Rojer Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.), pp.89-155, The MIT Press.

Chomsky, Noam (2001) “Derivation by Phase”, *Ken Hale: A Life in Language*. Michael Kenstowicz (ed.), pp.1-52, The MIT Press.

den Dikken, Marcel (1995) *Particles: On the Syntax of Verb-particle, Triadic, and Causative Constructions*. Oxford University Press.

Embick, David (2010) *Localism versus Globalism in Morphology and Phonology*. The MIT Press.

Embick, David and Rolf Noyer (2007) “Distributed Morphology and the syntax / morphology interface,” *The Oxford Handbook of Linguistic Interfaces*. G. Ramchand and C. Reiss (eds.), pp.289-317, Oxford University Press.

Halle, Morris and Alec Marantz (1993) “Distributed Morphology and the pieces of inflection,” *The view from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*. Ken Hale and Samuel Jay Keyser (eds.), pp.111-176, The

MIT Press.
Harley, Heidi (2010) “Roots, selection & domain for idiomatic meaning,” talk at The End of Argument Structure Workshop, University of Toronto.
Harley, Heidi (to appear) “On the identity of Roots,” *Theoretical Linguistics*.
長谷川信子（1999）『生成日本語学入門』大修館書店.
伊藤たかね・杉岡洋子 （2002）『語の仕組みと語形成』研究社.
Jacobsen, Wesley M. (1992) *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Kuroshio.
影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房.
影山太郎（1999）『形態論と意味』くろしお出版.
影山太郎（2000）「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好編『日英語の自他の交替』pp.33-70, ひつじ書房.
影山太郎（2001）「自動詞と他動詞の交替」影山太郎（編）『日英対照 動詞の意味と構文』pp.12-39, 大修館書店.
Kitagawa, Chisato and Hideo Fujii (1999) “Transitivity alternation in Japanese,” *Papers from the Upenn/MIT Roundtable on the Lexicon*, *MITWPL 35*. pp.87-115.
Marantz, Alec (1997) “No escape from syntax: Don’t try a morphological analysis in the privacy of your own lexicon,” *UPenn Working paper in Linguistics* 4(2), pp.201-225
Marantz, Alec (2001) “Words,” talk at *WCCFL 20*, University of Southern California.
三宅知宏（2005）「語の品詞性とアクセントー形態論と音韻論の節点Ⅳー」『国文鶴見』39, pp.1-12, 鶴見大学日本文学会.
西尾寅弥（1961）「動詞連用形の名詞化に関する一考察」『国語学』43, pp.60-81.
西尾寅弥（2004）「連用形名詞の性質についてー特に人工物を指示する場合ー」『大妻国文』35, pp.83-94, 大妻女子大学国文学会.
西山國雄（2000）「自他交替と形態論」丸田忠雄・須賀一好（編）『日英語の自他の交替』pp.145-165 ひつじ書房.
西山國雄（2013）「分散形態論」『レキシコンフォーラム No.6』ひつじ書房.
斎藤倫明（1992）『現代日本語の語構成論的研究ー語における形と意味ー』ひつじ書房.
田川拓海（2009）「分散形態論による動詞の活用と語形成の研究」筑波大学博士（言語学）学位請求論文.
田川拓海（2012）「分散形態論を用いた動詞活用の研究に向けてー連用形の分析における形態統語論的問題ー」三原健一・仁田義雄（編）『活用論の前線』pp.191-216, くろしお出版.
Volpe, Mark (2005) *Japanese Morphology and its Theoretical Consequences: Derivational Morphology in Distributed Morphology*. Ph.D. dissertation, Stony Brook University.

Notes

1　西尾（2004）ではタイプ F は連用形名詞としての考察の対象から外されている。
2　先行研究においても，「連用形名詞」という語を用い，また西尾(1961)を先行研究として挙げていても実際の考察対象はタイプ A, B のみであるというものは珍しくないように見受けられる。
3　分散形態論のモデルや方法論全体については Harley and Noyer (1999), Embick and Noyer (2007), Embick (2010) を参照されたい。
4　統語部門に関しては基本的に生成文法の Minimalist Program の枠組みを用いる。
5　最近の分散形態論のモデルの紹介においては，この部門に対する言及自体が無いか，“feature bundles”といった，存在するもの自身の名前で呼ばれることが多いようである（Harley (to appear) など）。
6　この訳語は田川（2012）による。管見の限り，今のところこの概念に対する定訳はもちろん，邦訳の試み自体もほとんど見受けられない。
7　Root についても今のところ定訳および邦訳の試みは見られない。一般的な形態論における「語根（root)」と紛らわしいため，ここでは“Root”をそのまま用いる。統語構造を表示する際などには記号“√”が使われることもある。Root は形態論的な概念というよりは，形式素性（formal feature）と対比される終端節点の一種類である，統語計算の対象になる，という点で統語論的な要素である。
8　Arad (2003) ははっきりとは論じていないが，ここでの，特に“Word-derived”という用語法には「Root+ 語彙範疇が“Word”という単位に相当する」という発想が表れているように思われる。この問題について踏み込むことは本発表の射程を大きく越えるため，Arad の用語法をそのまま採用することとする。
9　範疇未指定の状態から各語彙範疇への派生を考えるという発想自体は新しいものではない。たとえば，斎藤(1992)などを参照。
10　“Once the root has merged with a category head and formed a word (n, v, etc.), its interpretation is fixed and carried along through the derivation.” (Arad (2003): 740)
11　「語」という単位および関連する現象を局所性によって捉えようとする分析は分散形態論に限られるものではない（Ackema (1999) など）。
12　Volpe（2005）は「笑いもの」などの「- もの」は人を表すとして別扱いにしている。また，63 ページ脚注 14 に「食わせもの」が“apparent non-compositional exception”であるとの指摘があるが，（おそらく Volpe 自身も示唆しているように）「食わせ」の意味が慣用的（idiomatic）なのであって，「食わせ」と「もの」との組み合わせに関しては合成的であると考えられよう。
13　ここでの“#”は語彙的欠落（lexical gap）を表す。
14　1 モーラのものは見つかっていない。そもそも 1 モーラの連用形名詞は「(水道の)出」など，非常に限られている。また，Volpe (2005) は「見え」と自他対応するとしている「見」も root nominalization に（名詞化が不可能な例として）分類しているので，明示的な自他交替に関わる接辞が出てこない動詞と対応する連用形名詞も反例に含めてよいかもしれない。

15 この問題に対しては Kitagawa and Fujii (1999), 影山(2000, 2001)による分析がある。
16 厳密には, Root を動詞化する v と自他交替に関わる v は別の機能範疇である（cf. 西山(2013)）。自他交替や態に関わる v は動詞性を持つ v の存在を前提にすることが多いが，もし動詞性が無くても自他交替や態に関わる v が直接 Root を選択できるというようなことが経験的に検証されれば，Volpe (2005) の Root 派生分析は別の形で保持することも可能になる。
17 (15)の現象が Volpe (2005) の分析の反例となることはすでに田川(2012)で示唆されている。
18 名詞「甘え」から動詞「甘える」が派生された可能性もあるのではないかという指摘を受けた（杉岡洋子氏，個人的談話)。形態論的にはその可能性もあり，その検討については今後の課題としたいが, 日本国語大辞典によると名詞「甘え」の初出が 1942 年，名詞の意味と対応する可能性がある動詞「甘える」の初出は最も新しいもので 1906 年となっており，歴史的に名詞「甘え」の出現が早いというのは資料から見る限りでは考えにくそうである。ただし歴史的な事情は必ずしも現代語の派生関係への強い証拠にはならず，さらなる考察が必要である。
19 数はあまり無いが，同様にオノマトペ派生動詞と対応する連用形名詞（「テカり」など）なども問題になるであろう。
20 この例は竝木崇康氏よりご教示いただいた。記して感謝したい。
21 web サービス「はてなブックマーク」にも同じような意味の「お気に入られ」という用語が存在するが,「* お気に入る」「* お気に入られる」という形が不可能なので，動詞（述語）からの派生だと考えてよいかどうかさらに議論が必要である。
22 「泳がせ釣り」「泳がせ仕掛け」両方の意味で使用されることがあるようである。
23 携帯電話の話題では回線の契約をしたが実際には使用せずに置いておく行為を指す。パチンコの話題では（店側の）台を傾ける行為, あるいはその状態を指す。
24 「支え」「蓄え」には平板型のパターンも存在する。
25 この意味での「流し」が頭高アクセントであることは西尾(2004)に指摘がある (西尾(2004)：88)。
26 これらのノ格句は修飾句である可能性についても検証しなければならない（cf. 影山(1993)）。
27 この議論については田川(2012)，特に pp.209-211 も参照されたい。